

目次

はじめに 3

第一部 人物論Ⅰ（主要人物） 7

一章 桐壺帝 9

二章 桐壺更衣 37

三章 藤壺 75

四章 左大臣 103

五章 右大臣 123

第二部 人物論Ⅱ（協役）

第六章	弘徽殿女御の皇女達	151
第七章	桐壺更衣の母北の方	171
第八章	兵部卿宮——もう一つの光源氏物語	189
第九章	親王達——もう一つの光源氏物語	209

第三部 表現論（特殊表現）

十章	「をのこみこ」をめぐって	235
十一章	「疑ひなき儲けの君」をめぐって	243
十二章	『源氏物語』「にほひやか」考	267
十三章	『源氏物語』「たゆげ」考	285
付録	桐壺巻深読みのすすめ	297
初出一覧		319
あとがき		321

はじめに

平成元年四月、新設された同志社女子大学学芸学部日本語日本文学科の教員として採用された私は、心機一転、桐壺巻からあらためて『源氏物語』を読みなおしてみようと思いついた。そこで事前に桐壺巻の講義ノートを作成し、そこに自分の読みを書き込んでみた。前職（国文学研究資料館）でパソコン使用が義務付けられていたので、最初からパソコン（文明の利器）を利用しての執筆ならぬ入力作業だった。

二年後には『源氏物語』桐壺巻の読み方（正統二冊）を、大学の学術研究年報に掲載するまでに至った。幸い翰林書房の今井さんのご好意もあって、平成四年には『源氏物語の視角——桐壺巻新解——』というテキスト版として出版することができた。これは予想以上に売れたので、後に『源氏物語〈桐壺巻〉を読む』と改題（スリム化）して、同じく翰林書房から平成二十一年に再出版している（令和三年には『源氏物語入門』と改題して角川文庫より発行していただいた）。いろんな意味で、私にとっては息の長い記念碑的な注釈書となった。

当時の私は作品の注釈にのめり込んでおり、翌年には『落窪物語の再検討』（翰林書房）の第一巻を出版した。また『住吉物語』（和泉書院）や『百人一首の新考察』（世界思想社）というテキスト版も出

している。さらに研究会の仲間と『松浦宮物語』（翰林書房）及び『無名草子』（和泉書院）のテキスト版も出版した。

こうして注釈（テキスト）を精力的に作成する傍ら、論文目録をまとめる必要性も感じ、「百人一首」・「鎌倉時代物語」・「落窪物語」・「住吉物語」・「源氏物語巻別」・「源氏物語テーマ別」・「源氏物語動物」・「源氏物語語彙」・「沙石集」など、次々に勤務校の紀要などに目録を掲載した（目録屋というあだ名まで頂戴した）。そういった草稿は、パソコンのおかげで容易に増補訂正を繰り返すことができた。それが後に『源氏物語研究ハンドブック』（翰林書房）三冊として結実することになる。

ただここまでくると、もはや一個人の把握できる容量をはるかにオーバーしていることに気付かされた。こんなことに時間を費やすより、もっとやるべきことがあるはずだ。そもそも何のために注釈テキストを作成し、誰のために論文目録をまとめたのか。それは他ならぬ自分の研究のためであるはずだ。

幸い桐壺巻の注釈を徹底的にやったことで、注釈では済まされない問題が次々に浮上してきた。もちろん方法論も大事なのだが、こういった基礎作業も問題発掘には捨てたものではないようだ。私が最初に注目したのは、「桐壺」という用語であった。従来は楊貴妃を筆頭に、「桐壺」や「淑景舎」とは無関係に桐壺更衣のモデル論が行われていた。そこで「桐壺」に住居した人を探し求めたところ、遂に定子の妹原子（三条天皇女御）の存在を突き止めた。これは私の数多い研究の中でも上位に位置

する論（発見）だと思っている。

一つできると、気になることが次々に出てくる。桐壺帝のこと、藤壺のこと、左大臣のこと、右大臣のことなど、桐壺帝の後宮と政治体制を一つずつ論じていった。それが第一部である（朱雀帝についての論が漏れている）。第二部は主要人物から少しはずれた傍系・脇役の人々の論である。こういった脇役はとかく放置されがちだが、案外重要な役割を担っているものである。この中の「親王達」は特定の個人というわけではないが、皇太子になれなかった多くの名もなき親王たちの存在に光を当ててみたものである。それは「もう一つの光源氏物語」でもあった。言及できなかった靱負命婦・高麗人の相人・右大弁については心残りである。

第三部には表現論をまとめてみた。「儲けの君」や「たゆげ」など、注釈を施しているときにはその重要性に気付きもしなかった。しかしそれは私だけではなかったようで、初めて私が論文に取り上げたものもある。注釈執筆時には、もはや漏れなどないと思っていたのだが、後になると漏れている表現がいくつも出てきた。その時が至らないと、あるいはその能力がないと、大事な問題も素通りしてしまうものらしい。この歳になっても見落としはたくさんあるものだ。

こうして、注釈や論文目録から発展した桐壺巻の研究をまとめたのが本書である。ここまでくると三十年以上もかかってしまった。自分の要領の悪さをのしる一方、よくもまあここまで粘り強くやってきたものだと思えてやりたくもある。能力の劣る二流の研究者の研究とはこんなものであろう。

なお本書に掲載した論文は、すべて同志社女子大学に就職してからのものである。こんな私を三十年以上も雇用し続けてくれた同志社女子大学には、どんなに感謝しても感謝しきれそうもない。せめて研究で恩返ししたいと思っている。

第一部 人物論Ⅰ（主要人物）

一章 桐壺帝

一、描かれざる不安

桐壺巻には現天皇たる桐壺帝が中心に据えられ、それに付随する後宮や政治の状況が描かれている。しかしそれを読み取るだけでは、あまりに平板過ぎるだろう。物語と言えども、制度的には現実社会の規範から自由ではないはずだから、そこに社会制度の枠をあてはめてみることも決して不毛ではあるまい。

例えば現天皇即位以前には前天皇がおり、そして現在も院として健在かもしれない。また現天皇には、必然的に次期天皇（皇太子）の存在も考慮すべきである。それに伴って院（複数の可能性あり）や東宮の後宮も形成されているはずだし、それぞれに一族の繁栄を願う政治家達が張り付いているはずだからである。つまり常に前天皇・現天皇・次期天皇という三段階の政権担当者¹の動向を見通しておく必要があるわけである。もちろんこの三つは必ずしも別個のものではないし、天皇の交替とはかわりなく政権が継承されることもある。極端な場合は、政権担当者の都合で天皇の交替劇が演出されることもありうる（基経による陽成天皇退位や、道兼による花山天皇退位の例）。

后(中宮)という地位も案外重要である(一条天皇の母の諡子の例)。それは后が政権と密接に関連しているからである。しかも后は一度立后すると、たとえ天皇が讓位しても依然として後のままであった。だから三后の定員が塞がっている場合は、現天皇の有力女御といえども簡単には立后できないのである。こういった前後左右の状況に目配りをして、初めて物語の現在は立体的な膨らみを有してくるのではないだろうか。そう考えると、桐壺巻を単に後宮における帝の偏愛という読みで済ませるはなるまい。それではかえって物語を矮小化する恐れがあるからである。第一、その当事者たる桐壺帝に対する評価(賢帝か愚帝か)が全く提示されていないのではないだろうか。そこでわずかな資料を参考にしながら調査してみたところ、桐壺帝の即位が実現する過程において、何かしら皇位継承事件のようなドロドロとした世界が潜んでいることが見えてきた。そういった不安を秘めながら桐壺帝の現在があり、そして後宮における寵愛問題が発生し、さらにそれが必然的に将来の皇位継承問題へと連鎖反応をおこしていくのである。

桐壺帝の即位前史を幻視してみると、そこに藤壺の父帝たる「先帝」の存在が浮上してくる。この「先帝」以外にも、「一院」の存在が確認されるのだが(紅葉賀巻324頁)、それを統括した物語の皇統譜はどのように想定されるのだろうか。先帝と桐壺帝は直接の親子兄弟関係ではなさそうなので、そこに何らかの皇位継承問題は生じていなかったのであろうか。また後に「故前坊」の存在が明かされており(葵巻18頁・賢木巻93頁)、忌まわしい東宮の廃太子事件も想定されている。⁽¹⁾ そういった暗部にお

ける皇位継承事件に絡んで、六条大臣一家及び明石大臣一家の没落が幻視されるのではないだろうか。そしてさらには次期政権をめぐる新左大臣一派と右大臣一派の確執が、現在水面下で着々と進行しているのである。

このように考えてみると、この時代は相当に社会が混乱していたのではないだろうか。しかしこうした複雑な政治状況を背景にしつつも、物語は後宮における寵愛問題のみをクローズアップしているのである。本論ではその描かれざる桐壺帝即位前史の可能性について、なるべく本文に即して検討を進め、問題の所在を明らかにしてみたい。そうすることによって桐壺巻の読みは、より一層複雑かつ面白くなるはずである。⁽²⁾ なおの本文の引用は、小学館『新編日本古典文学全集源氏物語』による。

二、一院と先帝について

最初に先帝について考察する。先帝(せんだい・せんてい)という表記については、院号を有しない帝、つまり在位中に崩御された帝、あるいは讓位直後に崩御された帝を指すと言われている。⁽³⁾ するとモデルとして自ずから光孝天皇が浮上してくることになる。しかし先帝の使用例からすれば、前帝のみならず、数代前の帝を指す場合もあるようなので、必ずしも意味を一つに限定することはできそうにない。

そのため一院との先後関係や血縁関係(兄弟か従兄弟か叔父甥か)等の想定が非常に困難なのである。